遠山記念館だより

第61号

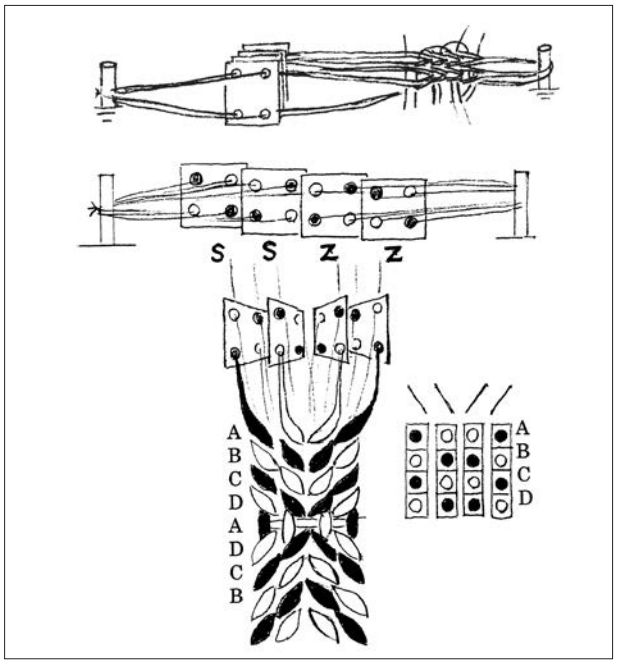
「永遠に」小林桂子　1985年　　220.0×110.0（cm）

◇◇ 館蔵品紹介 ◇◇

今秋の企画展、「織の世界に遊ぶ心―小林桂子の布創り―」（10月9日～11月28日 P.7参照）より、１点、染織作品をご紹介します。小林桂子氏は世界各地の織物の技法や文様を研究し、そこで得た知見をもとに作品創りを行っている織物作家です。写真の「永遠に」と名付けられた、「8の字崩し」のような形が躍るように連なる帯状の織物は、小林氏が「カード織」について研究していた時期に制作された作品です。1985年の個展での発表後、2017年、他の作品や小林氏の染織コレクションとともに、当館に寄贈されました。

ざっくりとした木綿地の縞（しま）文様は、紺、青、薄青の3色のグラデーションからなり、間を白色の筋が引きしめています。ところどころ縞の幅を変化させたところに、リズムを単調にさせない、心地よい揺らぎを感じます。

さて「カード織」ですが、耳馴染みのない方も多いことでしょう。通常、機織（はたおり）は、経糸（たていと）を張った機の前に座り、パッタンパッタンと緯糸（ぬきいと）を織り入れる様子が思い浮かびます。しかしカード織は、手のひらサイズのカード（回転綜絖（そうこう）板とも呼び主に正方形で材質は様々）に穴をあけて経糸を通し、クルクルと回転させながら、経糸の位置を変え、緯糸を入れていきます。つまり、糸と穴の位置関係で文様が決まる技法です。紀元前より行われてきたと考えられ、



カード織（図：小林桂子）

東南アジアや中国、中近東、北アフリカ、ヨーロッパなど広範囲の地域で、主に紐（ひも）や帯を織るために用いられてきました。

本来は真直ぐな帯状の織物を織るカード織に、織りながら曲線を作っていく「曲がり織」という技法を加えて制作されたのが、表紙の作品「永遠に」です。「曲がり織」は、小林氏がメキシコ中央高地の先住民、オトミ族が用いる「ラウンド・ショルダー・ウィーブ（Round shoulder weave）」(注)を参考にして、作品制作に用いた織技法です。オトミ族では短い貫頭衣のような、女性用肩掛けである「ケチケミトル（Quexquemitl）」を織る際に、この「ラウンド・ショルダー・ウィーブ」を使います。これは肩の丸みに合わせるために、織りながら曲線を作っていくもので、体になじむ衣料を、洋裁で用いるダーツ（布の内側をつまんで縫い、立体的にする手法）をとることなく織り上げることが可能です。「ラウンド・ショルダー・ウィーブ」の応用である「曲がり織」の作品、「永遠に」ではこの特性を生かし、長短の「8の字崩し」形を連ね、水、川、流れが連続するイメージを表現しています。横の長さは2メートルほどですが、悠々とした水の流れが、このまま延々と続いていくような感覚も覚えます。「永遠に」と同じ手法で、帯状の布が長く渦巻きながら天井から下がる「スパイラル」という立体作品も、同じ1985年に制作されました。

小林氏は「曲がり織」で細幅（ほそはば）の布を長く織り続ける際にはカード織を用いるとのことですが、織機で織る作品も1985年以降、次々に発表しています。なかでも目を惹くのが、「ゲート（門）シリーズ」と名づけられた作品群です。これは、中国やアメリカ、韓国等の新聞や漫画などを織り込んだ、大・小２枚組の馬蹄形の曲がり織作品で、全部で7点制作されました。いずれも織機に張った経糸に、緯糸として三角形の紙を通し、カーブをつけて門の形に織りあげた後、機から降ろし、紙の端を細竹に接着し固定して仕上げています。使用している素材が持つ印象の相違により、同型でも７点それぞれに異なる世界を感じさせているところに魅力があります。「ゲートシリーズ」はいずれも、「永遠に」と同じ2017年にご寄贈いただきました。本来なら７点全てを展示することで、作者の意図が反映されるものなのでしょうが、今秋の展覧会では、壁面の都合によりこの内の４点を展示しご覧いただく予定です。

（井上 則子）

ゲートシリーズより「中国ドラゴンの門」 1998年

(注)「カーブド・ウィーブ（curved weave）」、「シェープド・ウィーブ（shaped weave）」、日本語で「直角織」ともいう。

参考文献
・小林桂子『糸から布へ』日貿出版社 2013年 p.352-p.354、p.438-p.447
・Peter Collingwood, *The Techniques of Tablet Weaving* Robin & Russ Handweavers, 1982.

中村清次郎と中村邸

依田 徹

はじめに

当館の中心である遠山邸（旧遠山家住宅）は、昭和8年（1933）に着工し、2年7ヶ月をかけて同11年に竣工した。総監督は遠山元一の実弟である遠山芳雄が任され、設計者の室岡惣七と大工棟梁の中村清次郎が加わり、この3名が中心となって工事は進められた（図1）。

この3名の中で、最も不明な点が多かったのは中村清次郎であるが、昨年度にご遺族から青焼き図面（前号で紹介）等の寄贈が持ちかけられた。この間、中村清次郎邸（以下、中村邸と省略）の調査を行うなど、清次郎について多くの情報が判明した。本稿では清次郎の活動と、この中村邸について紹介したい。

図1　左より室岡惣七、遠山芳雄、中村清次郎
（「遠山邸竣工写真帳」より）

1　中村清次郎について

まず、中村清次郎の活動について見てみたい。清次郎に関する文献は少なく、これまでは『建築運動』（第6巻3号、1936年）掲載の下記の略歴が基本情報であった。

> 明治二十三年四月新潟懸西蒲原郡吉田村に生れて、同三十五年小学校卒業後、建築家を志して、上京した氏は、各種の建築に従事すること七ヶ年、その非凡を認められて、宮内省技師伊東藤一郎氏に学ぶ。明治四十三年歩兵十六聯隊に入隊し、除隊してより十年間、義兄の家に在りて、専ら業に励む、此の頃より氏の天性は愈々練磨されて、周圍の注目を一身に集め、各知名なる邸宅に於いて、献身的技能を発揮す。大正十二年現住所に建築業を開業して今日に至る。
>
> 今後共氏は、高級な日本住宅に、商賈心を離れて、衷心より従事せんことを念願としてゐる。

今回清次郎ご遺族からの提供の情報により、生年は明治23年（1890）4月15日であると修正された。また出生地は新潟県西蒲原郡吉田村大字吉田（現新潟県燕市）で、一時は近所の加藤家へと養子に出され、11歳の時に中村家に復籍している。当時の尋常小学校は3～4年の就学であり、小学校卒業前に復籍し、上京したことになる。

先の引用文の通り12歳から7年間、東京周辺で建築業に従事し、そこで才能を発揮し、やがて宮内省技師であった伊藤藤一に師事したようである。明治43年に20歳となり、3年間徴兵されて歩兵十六連隊に所属し、除隊後の大正4年（1915）に長瀬ヒサと結婚、兄弟の家で建築業をしていたらしい。結婚の同年に生まれた長女が、豊多摩郡中野町大字中野（現東京都中野区）を出生地としており、ここが兄の中村良勝の住所であるらしい。当時、財界人の間では中野から多摩丘陵にかけて中央線沿線に別邸を持つことが流行しており、清次郎はこうした需要に応えて活動していたものと思われる。建築家として名を上げ、大正14年には独立、東京府豊多摩郡杉並町大字阿佐ヶ谷（現杉並区阿佐ヶ谷）に一家を構えている。

この間の清次郎の携わった建築として、現在確認が取れる物件はない。ただし可能性のある物件として、日本基督教団安中教会（群馬県安中市）の義圓亭（図2）が数えられていた。義圓邸は同協会の牧師であった柏木義圓の書斎として、大正9年に信徒の中村清次郎が建築・寄付したと伝えられる。義圓亭は桁行2間・梁間3間、切妻造りの木造平屋建てで、6畳2室の間取りの和風建築である。ただし今回同教会に問い合わせた所、この中村清次郎については

図２　日本基督教団安中教会義圓亭

図３　中村邸外観

同姓同名の別人であった。

清次郎が遠山元一と関係をもった経緯は、同じく大工をしていた兄の中村良勝が、元一の笄町（現港区西麻布）の邸宅を手掛けたことに起因する。その後、比企郡川島町の本邸再建にあたり、良勝が自分より腕が良いと清次郎を推薦したのである。

昭和８年の遠山邸起工の時点で、清次郎は満43歳であった。心身ともに充実していた時期に、この恵まれた大仕事の棟梁を任された事になる。材料を集める段階から清次郎は芳雄と共に全国を回って銘木などの蒐集に当たり、施工に際しても川島町の農家に住み込んで、常に現場で作業に当たったことだろう。

邸宅の竣工後も、清次郎は遠山邸の維持に関与している。特に昭和15年に朝香宮鳩彦（やすひこ）王が来訪した際、宮内省の指示で中棟裏側に給仕用の階段を増築することになり、やはり清次郎がその工事を手掛けている。遠山家と家族ぐるみの付き合いを続けており、元一長女である吉田貞子が海外へ旅立つ壮行会の記念写真にもその姿を見る事が出来る。とりわけ約3年間の大工事を共にした芳雄とは親密な関係にあったらしい。芳雄は戦時下の満州に渡り、昭和20年に客死してしまうが、清次郎の遺品から芳雄の遺影が見つかっている。

清次郎は戦後も阿佐ヶ谷で建築業を続けているが、戦時下で長男の清久を亡くしたこともあり、その事業は引き継がれなかった。昭和39年８月９日に死去、満74歳であった。

２　中村邸について

今回、中村清次郎の遺族のご紹介で、清次郎が自らのために建てた中村邸（図3）の調査を行う機会を得た。以下、この中村邸について紹介したい。

中村邸は木造2階建てで、1階は桁行4間・梁間3間、2階の屋根は入母屋造りとなっている。今回の調査で2階屋根裏から熨斗形の棟札が発見され、「昭和三十一年七月吉日／中村」の墨書が確認された（図4）。ここから、この中村清次郎邸は、終戦後に一度阿佐ヶ谷駅前から現在地へ移転した後、清次郎が66歳の時に建てたものと判明する。

図４　中村邸棟札

西向きの玄関を上がると、廊下を挟んで南に6畳の座敷と北に6畳の次の間を並べ、次の間と玄関に隣接して3畳の納戸を設ける。座敷の南側には縁側を配し、この縁側から台所と風呂、それに厠を接続させる。2階には南に面して8畳の座敷があり、その北側に4畳半の部屋を2室東西に配する。遠山邸に比べれば通常の間取りの個人住宅であるが、その細部には遠山邸に似た意匠が確認される。

図5　中村邸1階6畳間の天井

1階の6畳座敷の重要な見どころとなるのは、中央に網代組を配した天井である(図5)。6畳間の天井に井の字形に竿縁を組み、中央を杉材の網代、四隅は板材を配し、残る区画は左官による塗り天井としている。遠山邸にも網代天井は多用されており、特に椹(さわら)材網代天井を中心に4種の天井を組み合わせた東棟居間に通じる意匠である。

2階の8畳座敷は、さらに凝った意匠となっている(図6)。西向きに半畳の床の間を開け、床柱を挟んで南側に棚を配す。棚は中央に円相窓を開け、襖を入れた天袋と地袋で挟むという構造である。円相窓と地袋の組み合わせは、遠山邸中棟2階数寄屋座敷の棚でも試みられた意匠である(図7)。

この2階8畳間には、縁側に向けて摺りガラスの明かり障子を入れ、その上には半円形に土壁を塗り残して欄間を開けている(図8)。この半円形の欄間も、遠山邸中棟2階数寄屋座敷の廊下に、同じ意匠が見られる(図9)。

また床と棚の間の壁は、土壁を塗り残して採光用の窓を開け、下地として垂直の2本の竹材と、これを水平に刺し通す板材が露出するようにしている(図10)。この意匠もまた、遠山記念館の離れ茶室の水屋に、ほぼ同じものが見られる(図11)。遠山邸茶室は、本邸とは異なり、裏千家流茶人の亀山宗月が設計したものであるが、この窓をはじめ廻り縁を雛留(ひなどめ)で納める技巧などが共通しており、施工そのものは清次郎が手掛けたと判断される。

そして調査した段階では失われていたが、本来この部屋には雪洞(ぼんぼり)形の照明器具が吊るされていたことが、竣工当初の写真から確認される(図12)。この照明も、遠山邸西棟梁に使われているものと同じ意匠である(図13)。

3　清次郎の作風

大工棟梁としての清次郎の仕事は、遠山邸に代表される高級住宅の建築にあった。その一つの特徴は釘を使わない高度な組木にあり、これは師匠である伊藤藤一の代表作である、中島知久平邸(群馬県太田市、重要文化財)にも共通している(図14)。御殿風の書院造りに数寄屋造りの別室を接続させる作風、細部の数寄屋の意匠も、中島知久平邸に通じるものがある。宮家の邸宅などを通じて蓄積された宮内省内匠寮(たくみりょう)の技術と経験が、伊藤を通じて清次郎に継承されているのだろう。

とりわけ清次郎は、組木を意匠的に用いる作風を特徴とするように見える。元一の長男である遠山一行も、清次郎について筬欄間(おさらんま)のような細工物が好きだったと証言している(『遠山元一と近代和風建築』所収「資料翻刻4」)。特に遠山邸西棟の数寄屋では、柾目(まさめ)と板目といった杢目の差を効果的に使い分け、そこに網代組や名栗材を組み合わせるといった技法で、装飾的な効果をあげている。このような作風は、おそらく遠山邸の建築過程において練磨されたであろうし、それが中村邸へと受け継がれているのである。

惜しむらくは、清次郎が手掛けたであろう首都周辺の高級住宅が、関東大震災や戦時下の空襲、あるいは戦後の都市開発の過程で失われていったことである。その後継者も戦災で失ったことから、清次郎の技術は一代のみとなり、その名前も遠山邸の棟梁として記憶されるに留まってしまった。ただし、清次郎の遺品として残された資料の多くが遠山邸に関するものであったことなどからも、遠山邸こそが清次郎の一世一代の仕事であったことは充分に読み取れる。

図14　中島知久平邸

図6　中村邸2階座敷

図7　遠山邸中棟2階数寄屋座敷

図8　中村邸2階座敷の欄間

図9　遠山邸中棟2階数寄屋座敷

図10　中村邸2階座敷の床の間脇

図11　遠山邸離れ茶室水屋の棚脇

図12　中村邸2階座敷竣工当初の写真

図13　遠山邸西棟の照明器具

企画展「織の世界に遊ぶ心―小林桂子の布創り」

10月9日（土）～11月28日（日）

身の回りの衣料やインテリアなどに用いられる様々な布。小林桂子氏は、その組織や織りの多様性に注目し、研究を続けてきた織物作家です。 1975～1981年の滞米中に、テキスタイル作家の草分け、エド・ロスバック（1914～2002）の「世界中の歴史的・民族的な染織品から創作を触発される」という思考に影響を受け、世界各地の染織品等を収集し、その技法を解き明かし、そこで得た知見を活かした作品創りに取り組んできました。

この展覧会では、2013年～2019年に当館へ寄贈された小林桂子コレクションと作品を合わせてご覧いただき、世界の織物の伝統技法や文様が、小林氏の豊かな感性により創造された作品の中で、新たな魅力を発する姿をみていきます。

主な展示品

○小林桂子作品

「地図Ⅳ」 1986年

「紫陽花」 1984年

「1/4円繋ぎ文様緯絣貫頭衣」
1980年

○小林桂子コレクション

「花鳥文様緯錦被り布」
（部分）
チュニジア　19世紀

「幾何・経縞文様織合せ織・紋織」コカ袋（部分）ペルー
チャンカイ文化(1100-1470頃)

「鉤針編の財布」
ヨーロッパ　19世紀頃

「花束文様綾地補緯糸紋織肩掛」
フランス　19世紀初め

会期中のイベント

○オンライン講演会（Zoom使用）**「世界の布から生み出す糸遊び」**

講師：小林桂子氏

日時：11月6日（土）午後2：00～3：30（予定）　参加費：無料　定員：80名（先着順）

お申し込み方法：下記アドレスにメールでお名前・電話番号・参加人数をお知らせください。
折り返し当館から招待メールをお送りいたします。（受付締切り11月4日）
お申し込み用アドレス：**inoue@e-kinenkan.com**

コレクション展 2

2021年12月11日（土）～2022年1月23日（日）

年末から年始にかけて遠山記念館の所蔵品の中から、伝俵屋宗達「大蟲図（たいちゅうず）」や森鳳聲「虎」といった干支にちなんだ美術品、また館蔵の名品の中から伝近衛信尹（のぶただ）「和漢朗詠集色紙貼交屏風」などを展示いたします。

伝近衛信尹「和漢朗詠集色紙貼交屏風」江戸時代　17世紀

伝俵屋宗達「大蟲図」
江戸時代　17世紀

森鳳聲「虎」
明治44年(1911)

雛の世界

2022年2月11日（金・祝）～3月13日（日）

江戸時代に開花した人形文化は、日本独自の雛人形を母体として、多種多様な人形を生み出してきました。本展では、雛人形を中心に江戸時代中期から昭和時代中期頃までの様々な種類の人形を展示し、日本の人形の歴史をたどっていきます。立雛（次郎左衛門頭）、享保雛、古今雛などの雛人形の他、嵯峨人形、御所人形、衣裳人形、賀茂人形、からくり人形、抱き人形、絹糸細工などを展示いたします。併せて会期中、遠山邸の大広間では、十畳の座敷いっぱいに飾られた雛壇飾りもご覧いただけます。これらは当館の創立者である遠山元一が、長女貞子の初節句の祝いとして、大正時代に揃えたものです。日本の人形が持つ魅力をご堪能下さい。

「遠山家雛壇飾り（御殿飾り部分）」大正時代

「享保雛」江戸時代中期～後期

「立雛（次郎左衛門頭）」
江戸時代中期～後期

2020年度　新収蔵品

昨年度、つぎの作品及びコレクション等のご寄贈をいただきました。心より感謝申し上げ、ご紹介いたします。

◇安藤恵子様（東京都小金井市）、佐々木容子様（東京都小金井市）

江原素六　額「勤謹和緩」
五十嵐勝雲「山水図」
遠山邸図面（前号で紹介）
中村邸棟札（4頁で紹介）
ドレッサー、漆器、写真資料
（いずれも中村清次郎の旧蔵品）

江原素六　額「勤謹和緩」大正10年(1921)

五十嵐勝雲「山水図」　昭和時代

2020年度催事報告

2020年10月4日　遠山邸研究会　第15回
「茶人そして茶室建築家
三代木津宗詮・宗泉」
講師：木津宗詮氏

10月10日　土曜講座
「皇室の茶道具」

遠山邸のバーチャルツアー

アメリカMatterport社の技術を用いた最先端の3Dカメラ技術を使い、デジタル上で遠山邸を再現しました。パソコン画面上などでカーソルを動かすだけで、通常非公開の二階や茶室を含め、遠山邸を自由に歩きまわれます。制作した淡交社の「デジタル茶の湯マップ」の他、当館のHPからも閲覧できます。

各所には建材や技術などに関する解説文を付けており、実際に邸宅を歩く際、スマートフォンで呼び出して解説を読むこともできます。

https://chanoyumaptokyo.jp/special/3dtooyamakinenkan/
淡交社　デジタル茶の湯マップ

●遠山家雛壇飾り　2022年2月11日（金・祝）～3月13日（日）

雛祭りの季節に合わせ、遠山邸の大広間で十畳の座敷いっぱいに飾られた雛壇飾りをご覧いただきます。これは遠山元一が、長女貞子（大正９年生まれ）の初節句の祝いとして揃えたもので、京都御所の紫宸殿（ししんでん）風の館に人形を飾る「御殿飾り」と、関東風の「段飾り」との二組で構成されています。「御殿飾り」は檜の樹皮で屋根を葺いた檜皮葺きで、すべて組み立て式になっており、また「段飾り」は七段で、特に五人囃子と随身には日本橋十軒店の名工「永徳斎」の商標が付いています。

＊新型コロナ感染拡大防止のため、現在、遠山邸の２階特別公開及び邸宅の解説は中止しています。

●ご来館のみなさまへ●

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、以下の点にご協力をお願いいたします。

・37.5℃以上の熱のある方、咳・咽頭痛などの症状のある方は、来館をお控えください。
・混雑緩和のため、展示室への入場を制限させていただく場合があります。
・ご入館時に検温ならびに連絡先の記入をお願いします。
・マスクの着用をお願いします。
・館内にアルコール消毒液を設置していますので、手の消毒に使用してください。
・館内では、会話を控えめにし、周囲の方と距離を保ってください。
・作品、展示ケース、壁や柱などには手を触れないでください。

利 用 案 内

◇入館料

	一　般	学　生
特別展	1,000円	700円
通　常	800円	600円
美術館閉館時	600円	400円

※中学生以下は無料、団体20名以上は2割引き

◇開　館　午前10:00～午後4:30（入館は午後4:00まで）
◇休館日　月曜日（月曜が祝日の場合は翌日）
12月21日（火）～2022年1月5日（水）
2月10日（木）、3月15日（火）
◇邸宅、庭園のみ公開
9月 28日（火）～10月8日（金）
11月 30日（火）～12月10日（金）
2022年1月25日（火）～2月9日（水）
3月16日（水）～4月1日（金）
◇詳しい展覧会情報は下記をご覧ください。
URL https://www.e-kinenkan.com

電車・バスでのご来館の場合
●東武東上線・JR埼京線　川越駅
●西武新宿線　本川越駅　　●JR高崎線　桶川駅
いずれも「川越駅－桶川駅」間の東武バスで
牛ヶ谷戸（うしがやど）下車、徒歩15分

お車でのご来館の場合
●圏央道川島ICより7分
●川越方面から国道254号線の宮元町交差点を川島方面へ右折、釘無橋を渡り最初の信号を左折、案内板に従って約10分

遠山記念館だより　第61号　　2021年9月発行
編集発行　公益財団法人 遠山記念館　　〒350-0128埼玉県比企郡川島町白井沼675
編集担当　久保木　彰一